

編集後記

年報編集についてある妄想が浮かんだ。年報を毎年特集号形式にし、その執筆・編集の任を、プロジェクト研究費の配分と抱き合わせるかたちで、特定のグループに請け負わせ、一任したらどうだろうか。そうすれば社研としての年報の特質がいやがうえにも現れてこようというものである。学問研究において市場メカニズムがどれだけ効果的な誘因を与えうるか疑問なしとしないが、しかし少くとも現在の「ボランテニア動機」に基く、中央計画化体制に比べれば、編集についての責任の在りかがはっきりし、企画意欲においてもすぐれた面が引き出せるのではないだろうか。さらにどんなに小さく見積ってみても、社研の年報の編集が私のような怠慢分子によってたまたま進められてしまうことに伴う危険や脆弱性を、ある程度は克服できるのではないだろうか。

妄想はやがて確信に近いものとなり、早速、事務局のメンバーに打ち明けてみた。やはり抵抗は強かった。現在のグループ研究の予算内でも、特集を請け負うグループが現れる可能性があり、それなら安くつくのにこしたことはないという

「効率主義」や、そして何よりも社研の伝統を精神的遺産として正当にも力強く受け継いだ「聖職主義」が私の前に立ちはだかった。所詮は責任のがれの発想という後めたさもあった、説得は難航を究めた。声の大きさでだけは負けまいと「しかし……、しかし……」とあらがっているところで夢から覚めた。今年もまたつがなく年報は仕上がった。約一名のすっこけ編集員を重く引きずりながらも、偉大なるかな事務局。聖なるかな社研。

(M I)